

會員よりのたより

臺北支部便り

昭和15年八月以來御無沙汰して居ますが、其後の活動概況を報告します。

★15年九月例会 九月14日夜、仲秋名月觀望會を兼ね、市公會堂屋上望遠鏡ドーム前にて開催、出席者 63 名、文藝誌“臺灣”の同人、川見駒太郎氏の「月と短歌」と題する趣味講演あり、萬葉より現代に至る歌人の秋月五十首撰を配布して解説され、次いで、臺大理農學部長 早坂一郎博士の“地球の年齢の話”があり、數多の地質學的例證を挙げられて、天文學者も、地質學者も、この問題に興味を有つてゐる點を指摘、結論に於て、地球物質の壽命を30億年の昔迄辿り得る事を示唆された。續いて、吉村昌久氏指導の下に、10纏鏡による月面觀望を行ひ、22時半散會。

★水星太陽面經過 窪川會長を始め、熱心な會員達は早朝より市公會堂屋上の觀測室に集り待機せるも、生憎の曇天、11時半頃より雲が切れ始めたので、ホンの一分間許り、小黑點となつて投影されたるも、再び顔を出そうとはせず觀測は遂に無爲に終つた。

★「木星と土星」觀望會 十一月16日19時、於觀測ドーム内、出席者約20名。一同、窪川會長の興味深い解説に耳を傾けつゝ、10纏屈折鏡にて觀望。天文趣味を満喫して、21時散會。

★十二月例会 十二月23日21時、於市公會堂一階南控室、出席者30名。要務を帶び來臺中の海軍水路部の桑原技師より“海の深さに對する概念”と題して海洋學的見地より“海”の解剖を試み、産業的、軍事的の重要性に就いて諄々と論じ、終りに、海洋深度測定の新方法2種類を紹介。尙、會員の質疑にも應じ、21時半了つた。

★16年二月例会 二月10日夜、於市公會堂一階廣間、出席者24名、窪川會長の“ロイツツプ島の思ひ出”と題する、昭和9年二月14日、ロイツツプ島日蝕觀測行の興味あふれる思ひ出話が約一時間半に亘り述べられた。

★三月例会 三月25日夜、於市公會堂南控室、出席者20數名、和泉三思氏の“星圖の見方に就て”と題する話の後、朝日新聞映畫部 武藤氏の好意による16ミリ、オール・トーキー映畫會に移り、文化映畫“北極洋の獵奇”“グライダー”等と、ミツキの漫畫を觀賞、21時半散會す。

★四月例会 四月23日夜、於市公會堂2階控室、出席者12名、窪川會長より

“日食は何故起るか”の少々程度の高き講演を聴取した後、種々天文談に花を咲かせて22時散會。
(蔡章獻記)

中 支 だ よ り

葦の葉に千卷きを想ふ五月晴れ。

一天雲無き大陸晴れ、肌にじつとり汗ばみて、もう今しがた、晝食を攝つて、行軍を起した許りなのに、葦の生えてゐる小道へ入つたら、其の香に急に御腹が空いて、節句を思ひ出し、美味しい千卷きを連想した次第です。

罌粟の花眞紅の色に妖婦かな

眼の覚めるやうな青色の罌粟畑に、眞紅の花がチュリツプのやうに咲き亂れてゐる様は、本當に美しいものです。けれども此の美しい花が阿片の素となつて、人を麻酔させるのかと思ふと、何だか一つ一つの花が妖麗を感じさせます。

三つ星が アカシヤの陰の 春の宵

冬の王座オリオンも、もう西の地平に傾きて、夜目にも白いアカシヤの花房の間に、三つ星が光つてゐます。疎遠を謝し、寸楮御伺ひ迄。

中支派遣軍〇〇部隊 正 村 一 忠

編 輯 室 よ り

何よりも先づ御詫びしなければならぬ事は、前からの御約束に反し、この號を年鑑の後半としないで、普通號とした件である。實は、編輯の際、いろいろ苦慮したのであつたが、どうも重要な原稿が机上に山積してゐるのを、放置しておいて、急を要しない年鑑などを作れないのである。現に、中等學校の天文新教材、遊星惑星論、火星報告、黒點計算論、それに、ガリレオ傳も、卷頭文なども、皆、時期を外しては、死文となる。こんなわけで、年鑑（恒數表を主としたもの）は、原稿の比較的閑散な時に延期することとした。天文用語集も、机上に順番を待つてゐるものの一つである。來年の日蝕の研究資料だつて、出さねばならぬものが澤山ある。中等學校教師のための参考教材も、矢つぎ早に發表しなければならない。戦陣にゐる勇士や、開拓士たちのためにも、時期を失しないうちに、書きたいものが澤山ある。一般大衆のための天文シーズンたる“夏期”も今や目の前にある。特輯號でも出さないと、やり切れない忙しさである。去る五月24日の總會は近頃實に楽しいものの一つであつた。うららかな春の野に行く気分も、新装の天文臺を見る喜びも、會員相ひ集つての談笑も、まことに楽しい體驗であつた。集まつた者が皆一枚表札を書いた思ひ出も、永く忘れられない。(P)